

# 都市空間の領域認識についての基礎的考察\*

## A Study on the Perception of the Space in the City\*

厚井理沙\*\*・菊池輝\*\*\*・北村隆一\*\*\*\*

By Risa KOI\*\*・Akira KIKUCHI\*\*\*・Ryuichi KITAMURA\*\*\*\*

### 1. 背景と目的

古くから都心部は人々の生活の中心地であり、多くの人々が集まる場所であった。近年のモータリゼーションの進展とともに、中心市街地の空洞化や商業機能の衰退等の問題が指摘されるようになったものの、各社の鉄道駅が集まり、企業のオフィスやデパート等の大型商業施設が立地する都心部は、いまだ多くの人々が集まってくる地域である<sup>1) 2) 3)</sup>。既存研究においても、郊外化の一方で、都心部が人々を誘引する力が増加傾向にあることが示されており、都心部は今なお、多くの人が集まり様々な活動が見られる地域であるといえる<sup>4)</sup>。

その一方で、ニュータウンに代表されるような郊外地域では、様々な都市施設、商業施設が整備されているにも関わらず、そこに子供達の遊ぶ姿や人々が集う姿を目にすることは少ない。このように近年郊外は、地域住民のコミュニティの希薄化等の社会的問題が指摘される地域となっており、その一因として人々のコミュニケーションの場となる公共領域の欠落が挙げられている<sup>5)</sup>。

以上のように都心部と郊外とで人の集積状況が大きく異なる原因として、人々の領域に対する認識が地域間で異なる可能性があると考えられる。

そこで本研究では、アンケート調査を実施し、人々の領域認識に影響を与えている要素を明らかにすることを第一の目的とする。さらにその結果を踏まえ、都心部と郊外の領域の比較分析を行い、地域間での領域認識の差異を明らかにすることを第二の目的とする。

### 2. 公共領域の定義

本研究では、「公共領域」の定義として、社会学者 Oldenburg<sup>6)</sup>の提案する“第三の場所”の概念と、Jane

\*キーワード：公共領域，郊外，イメージ調査，都市計画

\*\*学生員，京都大学大学院工学研究科

\*\*\*正員，博士（工），京都大学大学院工学研究科

\*\*\*\*正員，Ph.D，京都大学大学院工学研究科

（京都市左京区吉田本町，TEL&FAX075-753-5916）

Jacobs<sup>7)</sup>の提案する“偉大な都市”の概念を導入する。

“第三の場所”とは、誰に対しても開かれた場であり、人々が日常的に交流できる場である。また“偉大な都市”とは、十分に高い人口密度がある、複数の機能を果たす、1ブロックが短い、古い建造物が存在する、の4条件を満たす都市である。

本研究では、人々が上記の2つの概念を満たす領域を公共領域として認識すると仮定する。

### 3. アンケート調査概要

領域認識に影響を与える要素を明らかにし、都心部、郊外という地域間での領域認識の差異を明らかにするため、アンケート調査を行った。

#### (1) 調査対象領域

調査対象地域は、都心部と郊外の2地域とした。都心部として京都市中京区の御池通、四条通、川端通、烏丸通に囲まれる地域を、郊外として京都市西京区の洛西ニュータウンを選出した。その2地域から、前述の公共領域の定義を満たすと考えられる領域と、満たさないと考えられる領域を計10カ所選出した。アンケートではそれらの写真を提示し、次に示す質問項目により、それぞれの領域から受ける印象を尋ねた。

#### (2) 質問項目

上記の公共領域の定義を基に、領域認識に影響を与えると考えられる要素を9個選出した。（表1）

質問では、上記の9個の要素に対して「全く思わない」から「そう思う」までの7段階の指標で回答を求めた。さらに各領域に対して「どの程度公共的な場所と思うか」という質問を設け、「全く公共的でない」から「非常に公共的」までの7段階の指標で回答を求めた。これにより、各領域から受ける印象を計量化し、人々がその領域を公共領域として認識しているかどうかを明らかにすることを試みた。

また、調査対象領域を知っているか否かを尋ね、「知っている」と答えた回答者にのみ、領域の利用頻

度を「ほぼ毎日」から「全く利用しない」までの5つの選択肢から、領域での滞在時間を「15分以下」から「2時間以上」までの5つの選択肢から回答するよう求めた。

表1 公共領域認識の構成要素

様々な人がいる
人々が様々な目的を持っている
社会的な交流が行える
にぎわいがある
落ち着ける
自由にふるまうことが出来る
共有していると感じる
欠かせない場所である
歴史を感じる

(3)調査対象者

調査対象地域に居住する1600世帯を対象とし、住宅地図より無作為に抽出した。調査票は直接配布し、郵送により回収した。回収数は536部、回収率は33.5%であった。

4. 領域特性評価の主成分分析結果

領域認識に影響を与えている成分を抽出するため、表1の領域特性に関する9つの質問項目の回答について主成分分析を行った。分析に当たっては、アンケートの回答から得られた7段階の指標を1から7までの数値で表し、これらを標準化したものを投入変数とした。結果を表2に示す。

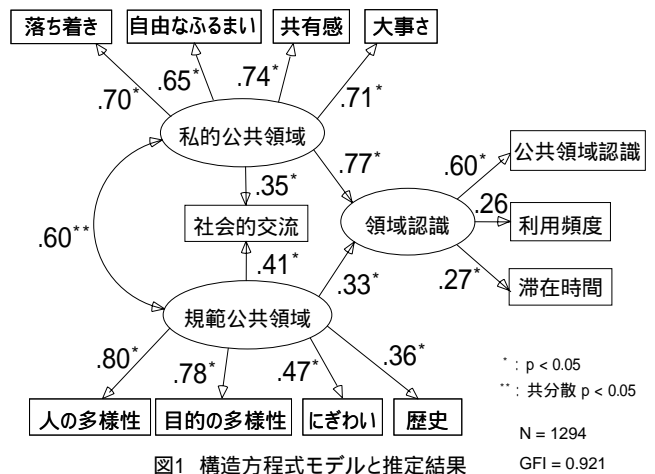
表2 領域特性評価の主成分分析結果

	成分	
	私的公共領域度	規範公共領域度
様々な人がいる	0.33	0.72
人々が様々な目的を持っている	0.23	0.78
社会的な交流が行える	0.49	0.54
にぎわいがある	-0.12	0.80
落ち着ける	0.87	-0.01
自由にふるまうことが出来る	0.74	0.15
共有していると感じる	0.72	0.30
欠かせない場所である	0.69	0.29
歴史を感じる	0.28	0.43
因子負荷量	31.01%	27.01%

第1主成分は、公共領域における個人のふるまいや領域に対する愛着を示すと考えられる項目が高い負荷量を示していることから、「私的公共領域度」と名付けた。第2主成分は、公共領域の物理的な要件を満たすと考えられる項目が高い負荷量を示していることから、「規範公共領域度」と名付けた。主成分分析により、公共領域の物理的な要件を満たす規範公共領域度の他に、私的公共領域度という成分が存在し、これらの2成分が領域認識に影響を与えていることが明らかとなった。

5. 領域認識のモデル推定

アンケートから得られた各測定指標、及び主成分分析により抽出された2主成分を基に、構造方程式モデルを用いて領域認識のモデル推定を行った。主成分分析結果を基に、このモデルにおいて2主成分は、外生変数であるアンケートの測定指標によって推定される潜在変数であるとした。さらにこれら2主成分が「領域認識」を形成し、「公共領域認識」、「利用頻度」、「滞在時間」に影響を与え、図1に示す構造方程式モデルを仮定した。投入変数として、領域特性を示す項目についてはアンケートの回答により得られた7段階指標の1から7までの数値を、利用頻度については各測定指標を日単位にした値を、滞在時間については各測定指標の対数値を用いた。なお、これ以降の分析では、「滞在時間」と「利用頻度」に対する回答を用いているため、調査対象領域を「知っている」と答えたデータのみを用いている。このモデルでは、各潜在変数の分散は1に固定し、「領域認識」から「利用頻度」へのパラメータの初期値は1に固定した。推定を行った結果、仮定したすべての因果関係が有意なものとなった。またGFIの値が0.921となり、比較的良好な適合度を示している。この推定結果を図1に合わせて示す。



この結果より、領域認識に影響を与えると仮定した全ての項目が、公共領域認識及び利用頻度、滞在時間に有意に影響を与えていることが確認できた。また上述の、公共領域の物理的な要件を満たす成分である規範公共領域度よりも、領域での個人のふるまいを表す成分である私的公共領域度の方が、領域認識に与える影響が大きいことが示された。

## 6. 領域認識の地域間差異

### (1) 領域特性評価の影響

都心部、郊外それぞれの調査領域に対する認識は、回答者の居住地によって相違が見られると考えられる。そこでまず、領域特性評価の地域間差異を明らかにするため、回答者の居住地の相違に着目して、都心部、郊外それぞれの調査領域に対して、図 1 で仮定したモデルの推定及びパラメータの差の検定を行った。ここでは、郊外の調査領域に対して回答した都心居住者のサンプルが少なかったため、以下に示すグループについて分析を行った。

都心居住者及び郊外居住者の、都心部の調査領域について

郊外居住者の、都心部及び郊外の調査領域について

想定したすべてのパスに条件を課さない場合、モデル全体の適合度は良好なものではなかった。そのため、

の都心居住者、郊外居住者の「規範公共領域度」からの全てのパスと、「私的公共領域度」から「領域認識」へのパスに等値制約を置いて推定を行った。その結果、都心部の調査領域に対する都心居住者の推定における「領域認識」から「滞在時間」へのパス以外、全てが有意なものとなり、モデルの適合度は比較的良好であった (GFI 値 = 0.902)。結果を表 3、表 4 に示す。

まず に関して、都心部の調査領域に対しては、都心居住者と郊外居住者では、「共有感」、「大事さ」が私的公共領域度に与える影響に有意な差が見られ、都心居住者が高い値を示している。次に に関して、郊外居住者は、都心部の調査領域と郊外の調査領域では、「大事さ」が私的公共領域度に与える影響に有意な差が見られ、郊外の調査領域に対して高い値を示している。また、「社会的交流」、「目的の多様性」、「歴史」が規範公共領域度に与える影響、規範公共領域度が領域認識に与える影響は都心部の調査領域に対して有意に高い値を示している。

### (2) 2 主成分の影響

構造方程式モデルによる推定により、都心部、郊外という地域間で、各測定指標が私的公共領域度、規範公共領域度に与える影響の大きさに相違があることが明らかとなった。そこで次に、私的公共領域度、規範公共領域度のそれぞれが、公共領域認識、利用頻度、

滞在時間に与える影響の地域間差異を明らかにするため、2 主成分を説明変数とし、公共領域認識、利用頻度、滞在時間を被説明変数とした重回帰分析をそれぞれ行った。この際も居住地の相違を考慮し、次に示すグループについて分析を行った。結果を表 5 に示す。

都心居住者の、都心部の調査領域についての分析

郊外居住者の、都心部の調査領域についての分析

郊外居住者の、郊外の調査領域についての分析

3 つの分析では、 $R^2$  値の値は小さいものの、各被説明変数に有意に影響を与えている説明変数があることが確認された。また 3 つの分析では共通して、私的公共領域度、規範公共領域度が公共領域認識に与える影響が有意であり、かつ私的公共領域度の与える影響が大きいことが明らかとなった。まず、都心部の調査領域について標準化係数の値を比較すると、私的公共領域度、規範公共領域度ともに、郊外居住者よりも都心居住者が高い値を示している。次に郊外居住者に着目して都心部と郊外の調査領域について標準化係数の値を比較すると、私的公共領域度、規範公共領域度ともに、都心部よりも郊外の調査領域に対して高い値を示している。こうした結果より、公共領域認識に与える影響は、私的公共領域度、規範公共領域度ともに、回答者の居住地に存在する調査領域に対して高い値を示す傾向があると考えられる。

滞在時間と利用頻度については、私的公共領域度、規範公共領域度の双方が有意に影響を与えているのは、郊外居住者の郊外の調査領域に対する認識においてのみであった。これについては、私的公共領域度よりも規範公共領域度の与える影響の方が大きい傾向にあることが示された。

### (3) まとめ

以上より、居住地によって都心部と郊外の調査領域に対する認識に相違が見られることが明らかとなった。

また調査領域が都心部に存在するか郊外に存在するかということや、回答者の居住地に関わらず、公共領域認識に与える影響は、規範公共領域度よりも私的公共領域度の方が大きいことが明らかとなった。そして、両成分の公共領域認識への影響は、回答者の居住地に存在する調査領域に対して高い値を示しており、領域認識という視点からは、先に述べた郊外における公共領域の欠落を示す結果は得られなかった。

表3 都心居住者、郊外居住者の都心部の調査領域についての推定結果とパラメータの差の検定 ( 1:都心居住者、 2:郊外居住者のパラメータ)

	私的公共領域			規範公共領域			領域認識			公共領域			利用頻度			滞在時間 <sup>注2</sup>			
	1	2	t 値 <sup>注1</sup>	1	2	t 値 <sup>注1</sup>	1	2	t 値 <sup>注1</sup>	1	2	t 値 <sup>注1</sup>	1	2	t 値 <sup>注1</sup>	1	2	t 値 <sup>注1</sup>	
私的公共領域							0.66	0.69	-										
規範公共領域							0.37	0.39	-										
落ち着き	0.62	0.64	0.41																
自由	0.62	0.65	0.00																
共有感	0.73	0.65	-2.05 *																
大事さ	0.68	0.64	-1.98 *																
社会的交流	0.22	0.25	0.34	0.49	0.50	-													
目的の多様性				0.77	0.78	-													
にぎわい				0.56	0.55	-													
歴史				0.44	0.46	-													
人の多様性				0.76	0.76	-													
領域認識										0.64	0.45	-1.95	0.04	0.13	-	0.08	0.18	1.50	

1: N = 452, 2: N = 433

\*: p < .1, \*\*: p < .05

表4 郊外居住者の都心部、郊外の調査領域についての推定結果とパラメータの差の検定 ( 1:都心部、 2:郊外のパラメータ)

	私的公共領域			規範公共領域			領域認識			公共領域			利用頻度			滞在時間 <sup>注2</sup>			
	1	2	t 値 <sup>注1</sup>	1	2	t 値 <sup>注1</sup>	1	2	t 値 <sup>注1</sup>	1	2	t 値 <sup>注1</sup>	1	2	t 値 <sup>注1</sup>	1	2	t 値 <sup>注1</sup>	
私的公共領域							0.69	0.78	5.90 **										
規範公共領域							0.39	0.32	3.17 **										
落ち着き	0.64	0.69	-0.46																
自由	0.65	0.66	0.09																
共有感	0.65	0.82	0.53																
大事さ	0.64	0.70	2.39 **																
社会的交流	0.25	0.33	0.51	0.50	0.39	-2.19 *													
目的の多様性				0.78	0.74	-2.17 *													
にぎわい				0.55	0.75	4.67 **													
歴史				0.46	0.39	-2.40 **													
人の多様性				0.76	0.83	-0.77													
領域認識										0.45	0.67	-2.16 *	0.13	0.40	-	0.18	0.26	-1.90	

1: N = 433, 2: N = 383

\*: p < .1, \*\*: p < .05

表5 主成分得点による重回帰分析結果

		滞在時間 <sup>注</sup>		利用頻度			公共領域認識			
		B	t	B	t	B	t			
都心居住者	(定数)	2.91	70.58 **	64.80	14.35 **	4.99	70.47 **			
*	私的公共領域度	0.21	0.22	4.82 **	-3.22	-0.03	-0.69	0.74	0.39	10.11 **
都心部領域	規範公共領域度	0.03	0.04	0.82	14.23	0.15	3.24 **	0.64	0.36	9.31 **
(N = 452)	R <sup>2</sup>			0.06			0.02			0.34
郊外居住者	(定数)	3.09	62.40 **	10.52	7.18 **	4.97	66.73 **			
*	私的公共領域度	0.001	0.001	0.01	2.78	0.09	1.79	0.61	0.34	7.68 **
都心部領域	規範公共領域度	0.33	0.32	7.09 **	0.12	0.004	0.09	0.35	0.22	5.00 **
(N = 433)	R <sup>2</sup>			0.10			0.01			0.16
郊外居住者	(定数)	3.19	61.25 **	63.80	9.91 **	5.25	77.84 **			
*	私的公共領域度	0.20	0.21	4.38 **	31.82	0.26	5.51 **	0.77	0.51	12.68 **
郊外領域	規範公共領域度	0.22	0.26	5.38 **	28.95	0.28	5.83 **	0.46	0.35	8.88 **
(N = 383)	R <sup>2</sup>			0.12			0.15			0.40

注:分析には対数値を用いた

## 8. 結論

本研究により、領域の認識には2つの要素が影響を与えていることが明らかとなった。それらは都市の物理的な要件を満たす規範公共領域度と、領域での個人のふるまいや愛着を表す私的公共領域度であり、中でも後者が領域認識に与える影響が大きいことが示された。これは、今後公共領域を創出していく際には、単に人の集積や多様な活動を可能にする物理的な領域の整備だけでなく、領域内での個々人の活動に重点を置いた整備を行うことの重要性を示しているといえよう。また、私的公共領域度及び規範公共領域度が公共領域認識に与える影響は、回答者の居住地に存在する調査領域に対して大きくなる傾向があった。しかしながら、それら2要素が滞在時間や利用頻度に与える影響については有意な結果は得られなかった。すなわち、人々に公共領域として認識されることと、領域が本研究で

定義したような公共領域として機能していることとを結びつけるものではなかった。

今後は、規範的に措定される公共性と都市住民が感性として持つ公共性との乖離についてさらなる分析を行う必要があるだろう。

### 参考文献

- 1)北村隆一編著：ポスト・モータリゼーション 21世紀の都市と交通戦略，学芸出版社，2001。
- 2)北村隆一編著：鉄道でまちづくり 豊の公共領域がつくる賑わい，学芸出版社，2004。
- 3)前田敬，福井賢一郎，北村隆一：郊外居住に着目した公共領域での娯楽活動に関する考察，土木計画学研究・講演集，26巻，2002年。
- 4)明石修，菊池輝，福井賢一郎，北村隆一：動的都市類型と人々の生活行動に基づく都市圏の内的階層性に関する研究，都市計画論文集，No.38，p.385，2003。
- 5)坪郷實編：まちづくりと公共空間 新しい公共空間を作る 市民活動野営みから，日本評論社，2003。
- 6)Oldenburg,R: The Great Good Place Cafes,Coffee Shops,Bookstores,Bars,Hair Salons and Other Hangouts at the Heart of a Community, Marlore&Company,New York:Paragon House, 1989.
- 7)Jacobs,J.: The Death and Life of Great American Cities, Vintage Books USA, 1961.